

茂木智弘の外国語活動（第3学年）研究計画

1 本研究で目指す子ども

新学習指導要領では、外国語によるコミュニケーションの見方・考え方は、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して考え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」である。特に小学校外国語教育においては、この見方・考え方の前半部分（「～着目して考え」まで）を重視すべきとも記述されている。具体的には、相手の発する外国語を注意深く聞き、相手の思いを理解しようとする。もっている知識等を総動員して相手に外国語で自分の思い伝えようとする姿である（新学習指導要領解説一部抜粋 H29.6）。この姿を具現するために、私は言葉に着目する研究を進める。理由は、以下に述べる言語獲得の過程に指導上の問題があり、目指す子どもの姿が具現できていないと考えるからである。

従来指導では、外国語（以下英語）を言葉を記憶する（以下インプット）する際、教師が英語を教え、反復させることで、短期記憶から長期記憶へ送る指導が中心であった。そのため、子どもは、英語を日本語と関連付けて記憶するだけにとどまっていた。このような子どもは、例え意欲的に英語を使っているように見えても、互いの思いを聞いたり、伝えたりするためではなく、記憶した英語を目的や場面、状況に応じて日本語と照らし合わせて使っているに過ぎない。自己紹介をしようという目的に対して、相手が至近距離にいるのに大きな声で元気よく **What's your name?**と叫ぶ姿である。本来言葉は、情意と関連付きながら使われるものである。言葉の響き・抑揚等、言葉そのものの変化が表れたり、言葉に表情・ジェスチャー等が連動したりするのはそのためである。

そこで、私は子どもが英語をインプットする際、情意と結び付けられる指導を提案する。子どもが他者（対象）とのかかわりから英語に着目できるようにする。なぜなら、互いの情意が英語に乗せられているかどうかは、相手のかかわりに表出されるからである。そのために、まず子どもにとって違和感のあるモデル（互いの意図が伝わっていない、誤解が生じている音声・動画・絵等）を提示する。そうすることで、子どもは他者とのかかわりから、言葉の要素（意味・働き・使い方等）に自ら気付くようになる。このような子どもに魅力的もしくは必然性のある活動（以下アクティビティ等）を繰り返し仕組む。言葉の要素（意味・働き・使い方等）と情意を関連付けてインプットした子どもは、情意が高まれば高まる程、相手の意図を理解したり、自分の意図を表現する手段（言葉の響き、声や言葉に付随する表情やジェスチャー等）を工夫するようになる。

私は、**言葉の要素（意味・働き・使い方等）に気付き、聞き方・伝え方を工夫する子ども**を目指す。

2 本研究で育成する資質・能力

①知識・技能	②思考力・判断力・表現力	③態度
言葉の要素 ○英語の特徴やきまりの知識 ・音声（言葉の響き等） ・語彙（意味等） ・表現（抑揚等） ・文法（語順等） ○英語を運用する技能 ・聞き方（問い返し等） ・伝え方（表情・ジェスチャー等）	○目的や場面、状況に応じて、コミュニケーションを図る力 ・言葉を推測する力 ・考えや気持ちを伝え合う力 ○考えや気持ちを整理し、再構築する力 ・考えや情報を整理する力 ・考えや情報を構造化する力	○互いを理解し合うために、自主的・主体的に英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度

3 主張する働き掛け

単元導入において子どもは、提示した課題を理解し、必要な言語材料及び学習内容に触れている。このような状況において、次の働き掛けをする。

働き掛け1

違和感のあるモデルを提示し、何が問題かを問う。

言葉による見方・考え方を働かせながら問いをもたせるための働き掛けである。

必要な言語材料や学習内容に触れている子どもに、必要な言語材料を使った違和感のあるモデル（互いの意図が伝わっていない、誤解している等）を提示する（全体提示）。すると子どもは、**他**

者とのかわりから言葉(英語)に着目し、違和感を感じるようになる。そこで教師は、何が問題なのかを問う。子どもは、感じた違和感から、コミュニケーションが成立していないことに気づき、どうしたら改善できるのか考えるようになる。この姿を問いをもった姿とする。

働き掛け2

繰り返し違和感のあるモデルを確かめさせ、改善策とその理由を問う。

言葉の要素に気付かせ、活動への見通しをもたせるための働き掛けである。

どうしたら改善できるのか問いをもっている子どもに、繰り返し違和感のあるモデルをタブレット端末を使って、班で確かめさせる。一つのモデルを様々な視点からじっくり観ることで、改善策をより多く引き出すためである。また、違和感のあるモデルには、互いの意図が伝わっていない、誤解している等の要因が含まれるものとする。子どもは、**他者とのかわりから言葉(英語)に着目し**、言葉(英語)の要素に気付き、相手の意図を理解したり、自分の意図を表現する手段をどのように改善すればよいか考える(①知識・技能、④協働性、⑤ツール活用能力)ようになる。このような子どもに学級全体で改善策を問う。すると子どもは、考えた改善策を表出するようになる。教師は、改善策を聞きながら、何故そう考えたのか理由等を問い返ししながら、改善策を整理する。子どもは、改善策と共にその改善策を考えた理由から友だちとの共通点、相違点に気づきながらより自分に合った相手の意図を理解したり、自分の意図を表現する手段(言葉の響き、声や言葉に付随する表情やジェスチャー等)を考えるようになる。この姿が見通しをもった姿である。

働き掛け3

形態を変化させながら、繰り返し魅力的なアクティビティ等をさせる。

想定した資質・能力を発揮し、伝え合えた達成感をつかませるための働き掛けである。

自分なりの改善策を考えた子どもに実際に使わせる。使わせるアクティビティ等は、限定された相手から不特定多数の子どもへと変化をさせながら、繰り返しさせる。場面や状況の変化があっても使える実感をもたせるためである。子どもは、**他者とのかわりから言葉(英語)に着目し**、目的や場面、状況に応じて、英語を選択し、互いの意図が伝わるように表現する手段を工夫しながら積極的にやり取りするようになる(①知識・技能、②思考力・判断力・表現力、態度③)。

このようにして一連の学習を経て、**言葉の要素(意味・働き・使い方)に気づき、聞き方・伝え方を工夫する子ども(Cn)**が目指す姿である。

働き掛け4

アクティビティ等で分かったこととできたことを問う。

発揮した資質・能力を自覚させるための働き掛けである。

アクティビティ等でやり取りした子どもに、どんなことが分かり、どんなことができたかを問うたり、記述させたりする。すると子どもは、発揮した資質・能力について自覚するようになる。

4 検証

(1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、想定したCnになったか。
- ② 構想した働き掛けにより、想定した「見方・考え方」を発揮することができたか。
- ③ 構想した働き掛けにより、想定した資質・能力を発揮することができたか。
- ④ 子どもは発揮した資質・能力を自覚することができたか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け2・3を受けて、英語の要素に気付き、表現する手段を工夫できたか発言や実際の子ども姿で検証する。
- ② 働き掛け1を受けて、他者とのかわりから使われている英語に着目したかどうかを発言や挙手で検証する。
- ③ 働き掛け2、3を受けて、設定した資質・能力を発揮していたかどうかを発言や実際の子ども姿で検証する。
- ④ 働き掛け4を受けて、発揮した資質・能力を自覚していたかどうかを記述で検証する。

5 年間の授業計画

- | | | | |
|-------------|------|------------------------------|-------|
| (1) 指定研究授業 | (6月) | 「Lesson 2 How are you?」 | (4時間) |
| (2) 中間検討会 | (9月) | 「Lesson 5 What do you like?」 | (5時間) |
| (3) 初等教育研究会 | (2月) | 「Lesson 9 Who are you?」 | (5時間) |